
夢じゃない

新木吾妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢じゃない

【Nコード】

N1704C

【作者名】

新木吾妻

【あらすじ】

俺は17才の高校生、彼女は23才、いくらなんでも急展開すぎると思う。

(前書き)

今回は勢いのままバカっぽく書いてみました、小説としての方向性が微妙です。

暑い、まだ6月だったのに、今日はやたら暑い。
Tシャツが少し汗ばんで気持ち悪い。

快晴に恵まれた日曜日の駅前、小さな駅だが行き交う人達が多い、
みんな思い思いの目的があるのだろう、様々な様相の人達が駅に吸
い込まれて行く。

「ノリシヤケ弁当お待ちどう」

「あつ、はーい」

おぼちゃんの野太い声で我にかえる。

弁当屋で弁当を受け取った俺は、駅とは反対方向に歩き出す。

今日、両親が法事やら何やらで居ない、自分で作る甲斐性も無い俺
は駅前の弁当屋に昼食を買いに来ていた。

遅れたが自己紹介をしよう、俺は平井哲郎^{ひらいてつろう}、高校2年で17才、勉
強も運動も普通で取り柄と言え健康くらい、もちろん彼女なんか
居ないぞ。

「……はあ…」

なんか知らんがどつと疲れた…
早く家帰って弁当食ってからも一回寝よ…

どさっ

んっ、ってうわっえっえっ…

前を歩いていたっぽい女の人が倒れた？

「ええええー！」

周りを見渡す…

誰も居ないし、俺しか居ないし…

どうしよう、どうしようどうしようどうしよう。

いや助けるだろ。

「大丈夫ですか？」

急いで駆け寄って声を掛ける。

……………

反応無し。

……この場合はしょうがない、しょうがない。

「えっと…失礼します」

うつ伏せに倒れた彼女を抱き起こす、顔が地面に着いていたのでそのままだろうと思ったからだ、下心は無い、無いっただけ無い。

「Oh！」

綺麗な人だ、二十代前半くらいだろうか、ぴしッとアイロンされたシャツが大人っぽい、っていうかいい匂いだ…っじゃないだろ俺！

「大丈夫ですか？しっかり？」

軽く揺すりながら声を掛けてみるが反応は全く無い。

これはマズイ…

ポケットから携帯を取り出す…

あれ…右…左…後ろ…

無い、忘れて来た！弁当買うだけだから置いて来たんだ。

うわぁ…どうしよう…どうしよう、どうする？えーとえーとえーと…

「……うっ…」

「えっ？」

気が付いた？

彼女と目が合う。

「「……………」」

お互い沈黙、ちなみに俺の立て膝に彼女が寄っかかる体制。

「きゃあああああー！」

「ええええええー？」

ぴたーーーーん！

ひっぱたかれた。

「何やってるんですか！変態！」

そりゃ無いよ、俺ってそんなに変態面かよ。あまりの異常事態に張られた頬に手をあてて固まってしまった。

「何事じゃあい！！」

ドスドスと走って来たのは、近所の大工の源さんだ、良かった…知り合いだし弁護してもらおう。

「助けて下さい！」

をいをいをい！助けを求め様とする彼女に突っ込もうとした時。

「こおのどぐされがあ！」

えっ、源さんなんか振り被ってる？

って…ええええー！

「ちょっと…待って待って！三件隣の哲ろ」

んばきい！

「ぐはあ」

そりゃ無いよ源さん……………

.....

.....

.....

う…

左頬の冷たい感触で目が覚めた。

「冷たい…痛い…」

「あっ、気が付きましたか？」

なぜか布団に寝ていた、目の前には綺麗な女の人、誰だっけ……あ
っ！

ぱっと体を起こして辺りを見渡す、どこかの家の中…
………源さんは…居ない。

「あの…」

「申し訳ありませんでした」

女の人に土下座された。

「ええええ、ちょちょちよつと…」

あわわ人に土下座なんて初めてされた、俺は悪くないのかもしれない

いが、人を見下ろすなんていい気分じゃない。

「お、お、お願いします、顔を上げて下さい！」

ちょっと俺必死。

「しかし…私が勘違いしたばかりに…」

とにかく、いいからいいからと頭を上げてもらう、誤解解けてるっぽいし。

「あの…ここは？」

今の状況がものすごい気になった、知らない部屋に知らない布団だし。

「ここは私のアパートです、病院にと思ったんですが、大工の方が『でえじょうぶだこれくれえ、唾つけときゃ治らあ』って言うたので、近かったこちらに運びました」

源さん…あんた江戸っ子だよ…

「そ…そうですか…で源さんは？」

「あなたをここに連れて来たら現場に戻りました、後であなたの家に行くと言っていました」

うーん…とりあえず状況は掴めたけど…これからの状況をどうしようか考えると…頭が沸騰しそうだ…

「……えーと」

「申し遅れました、私、高橋紫^{たかはしゆかり}と申します」

またまた深々と頭を下げられた。

「あわわわ、お、お、俺は平井哲郎ですう」

俺も布団から出てそれに習う。

………

なんとなく頭を上げられず、その体制のまま彼女を見てみた。
すごい低いところで目が合った。

………

「…ふふ…」

「…ははは…」

高橋さんが笑いだして、俺もつられて笑いだす、二人で笑いあってしまった。

「そうだ、高橋さんは大丈夫なんですか？」

高橋さんは道端で倒れたんだ、殴られただけの俺が寝ててどうする。

「あっ、私は大丈夫です、ちょっと…ダイエットしてて、ちゃんと食べていなかったただけですから」

「…そうですか、じゃあ気を付ければ大丈夫…かな？」

「は…はい、本当に申し訳ありませんでした…」

そう言う和高橋さんは赤くなってうつ向いてしまった。

……………

か…かわいいじゃねえか…第一印象よりずっと幼い感じに見えて萌えてしまった。

「とととにかく、もう俺大丈夫そうです、帰ります！」

俺も恥ずかしくなってきたしまった、長居するのも迷惑だし…帰ってノリシヤケ食おう…

「そんな…せめてお茶く「あっ！ノリシヤケ！！」

弁当の存在を忘れていた。

「のりしゃけ？」

顎に人指し指をあてて首を傾げる高橋さん…いちいち萌えるなこの人。

「いや、べ…弁当買って、持ってたんすけど…さっきんトコに置いて来ちゃったっぽいッスね…はは…」

言ってみて微妙に照れた。

「そんな…私のせいで大切なお弁当が…」

そんなに大切じゃない。

ぐう

タイミングよく俺の腹が鳴いた。

「……………」

「平井さん……腹ペコですか？」

絶対天然だ、この人。

「は…はい」

「私、何か作ります！」

「ええええー」

「えーってなんですか、私料理出来ますよー」

「いやそうじゃ無くて、わ、悪いっスよ」

「全然いいですよ、お礼と言うか…何かもう暇なんです、私」

ねって感じでにこやかに言われた、そんなんもう頷くしか無いやん…よく考えたら嬉し過ぎる展開やん。

という訳で、一人暮らしの女性のアパートでご飯をご馳走になる事になってしまった。

.....

ああ…落ち着かない…手持ちぶさたでそわそわする。

んざっんざって台所から何かを炒める音が聞こえる。

.....

異性の部屋に入るのなんて初めてだ、几帳面に整頓してある、すごい清潔感だ、なお落ち着かない。

「平井さんはおいくつですかー？」

台所から声が掛った。

「あっ、えっと17ッス、高2ッス」

「やっぱ若あい、私23ですー」

ふむふむ、予想通りの年齢だ、話してみるともっと幼いけど…

「社会人さんですか？」

台所を隔てた扉越しに話してるからか、ちょっと遠慮が無い俺。

「はいー、事務員やってますー」

「いいッスね、俺も早く働きたいですよ」

本音だがバイトすらしない俺。

「そうですかー？、お給料貰えるけど大変ですよー、私トロいからいつも怒られるしー」

申し訳無いがこれも話してみて納得。

「へえー、意外ッスね、何かやり手っぽいッスよ」

ヨイシヨしといた。

「ふふ、そうかなあ、さあ出来ました」

扉が開いて、高橋さんがはにかみながら戻ってきた、料理も出来たらしい。

「簡単な物ですがどうぞー」

おお、オムライス！俺の好物上位ランクだ。お腹が空いているものもあるが、すごいうまそうだ、遠慮しないで頂こう。

「い、いただきます！」

「はい」

ガツガツといただく、左頬がちょっと痛いけど。

「うまつ！うまい！」

マジでうまい、半熟丁度良いし。

「ふふ…」

高橋さんがニコニコと俺を見てる、うう、はしたないのはわかりますがスプーン止まらんのです。

「ごちそうさまッス」

「食べるの早いですね、お粗末様ですー」

ニコニコがたえない高橋さん、お茶煎れますってまた台所に行った。

うーん…彼女とかいた事無いけど、高橋さんみたいな人だったら幸せだろうなあ…

「はあ…」

なんかここにいと、夢を見てしまいそうだ、お茶飲んだら帰ろう…

「平井さん？どうぞ」

わっ、妄想してたら高橋さんの接近に気付かなかった、たじろぐ俺。高橋さん、キョトンとしてる、頭の上に？マークが浮かんでいる、わけ無いがそんな感じ。

「……………」

うう、さっき余計な事考えたからか、意識してしまう。
今日会ったばかりなのに、もうまともに顔を見れない。

「：どうしました？痛みますか？」

俺の頬に手をあてながら、顔を寄せてくる：えっ！

「うおう！」

ずばばっと後ずさる。

「うわぁ、どうしました？」

俺の座ったままスウェー&バックステップに高橋さんもびっくりしてる。

だぁー！、もうダメだ、ここにいるとおかしくなる、帰ろう！

「俺、帰ります！」

「えっ？」

扉にずんずん行く、なんかすごい勢い。

「ち、ちよっと待って」

高橋さんに後ろから両手で両足を掴まれた、っていうかそのまま引っ張られた。

「んがぶっ」

手が間に合わず顔面から床にクラッシュした。
痛い！源さんのパンチ並に痛い！

「な…ないふうんれふか（何するんですか）…」

「ご、ごめんなさい」

おたおたと起こしてくれる、大丈夫ですかを連呼して手で顔をすりすりされた。

……おおう、痛みが引いて行く。

「も、もう大丈夫ッス」

ちょっと近すぎ、俺照れすぎ。

「はい、ごめんなさい…」

そんなに謝られると、恐縮してしまう。

………

結局もう一杯お茶をいただいてる。

出してもらった濡れタオルで鼻を抑える、鼻血は出てないけどやっぱり痛い。

「あの！連絡先を教えてください」

終始申し訳なさそうにしてた高橋さんが言う。

「は？」

は？

「いや、その…お礼とかちゃんとしてないし…これっきりとかじゃ無くて…その…」

もじもじと指を絡ませながら小さく呟く高橋さん、顔赤いし。

脈アリ？

うわ、ナニコレ嬉しい！

「は…はい、俺もこれっきりじゃ無い方が…いいです」

うお、ナニコレ恥ずかし！

「……えへへ」

顔を上げた高橋さん、くらっときた、はにかむ顔がものすごい萌えた、あなたは本当に年上でしょうか？

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ようやく涼しくなり始めた頃、高橋さんの家を出て家に帰っている。手には弁当のかわりに高橋さんの電話番号のメモ。

さっき家を出る時、しつこく『彼氏いませんから』を連呼されて送り出された。

いくら何でもわかりやすすぎる、俺の気分は高鳴りっぱなしだ。

それにしてもすごい1日だった…っていうか有り得ない。

メモを確認する。

夢じゃない、現実っぽい。

(後書き)

書いていくうちに話の方向性変わってしまいました、でもキャラが
なんとなく立ってしまったので投稿してみました、なんか二人の絡
み書いてると面白くて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704c/>

夢じゃない

2011年1月3日19時36分発行